

## 統合失調症患者におけるドパミン過感受性精神病の治療抵抗化への影響—長期予後予測因子の解析

Impact of dopamine supersensitivity psychosis in treatment-resistant schizophrenia: An analysis of multi-factors predicting long-term prognosis

山中 浩嗣<sup>1,2</sup>、金原 信久<sup>1,3</sup>、鈴木 智嵩<sup>1,4</sup>、高瀬 正幸<sup>1</sup>、森山 稔弘<sup>2</sup>、渡邊 博幸<sup>1,3</sup>、平田 豊明<sup>2</sup>、  
浅野 誠<sup>2</sup>、伊豫 雅臣<sup>1</sup>

1 千葉大学大学院医学研究院精神医学

2 千葉県精神科医療センター

3 千葉大学社会精神保健教育研究センター

4 公徳会佐藤病院

[Schizophrenia Research 2016. 170(2-3), 252-258]

目的 統合失調症患者の長期予後に関して、これまでの研究から幾つかの予後予測因子が知られているが、その相互関係についてはいまだ明らかでない。ドパミン過感受性精神病(DSP)は長期の薬物療法に関連する臨床的概念であり、リバウンド精神病、抗精神病薬の薬効への抵抗現象、遅発性ジスキネジアなどを特徴とする。そして近年治療抵抗性統合失調症(TRS)に関係する予後不良因子である可能性が示唆されている。今回、TRSへの移行にDSPが与える影響について検討することを目的とした。方法 日本国内の3病院における265例の患者を、面接と後方視的調査に基づきTRS群(80例)とNon-TRS群(185例)に分類した。予後予測因子として、全治療期間からDSPエピソードの有無とその他の因子(精神病未治療期間、病前適応、初発エピソード精神病における治療反応性、deficit症候群の有無)を抽出し、群間比較を行った。本研究は各施設の倫理審査委員会の承認事項に則り被験者から書面による同意を得て行った。結果 精神病未治療期間以外のそれぞれの因子についてはNon-TRS群に比してTRS群で有意に不良であった。回帰分析の結果、DSPエピソードの有無とdeficit症候群がオッズ比でそれぞれ14.9、19.7と高値であった。結論 これまでに報告されている予後予測因子は本調査の患者群でもある程度影響を及ぼしていることが示された。これに加え、薬物療法の継続中に発生するDSPエピソードが、deficit症候群と並んで治療抵抗性への促進因子であることが示唆された。